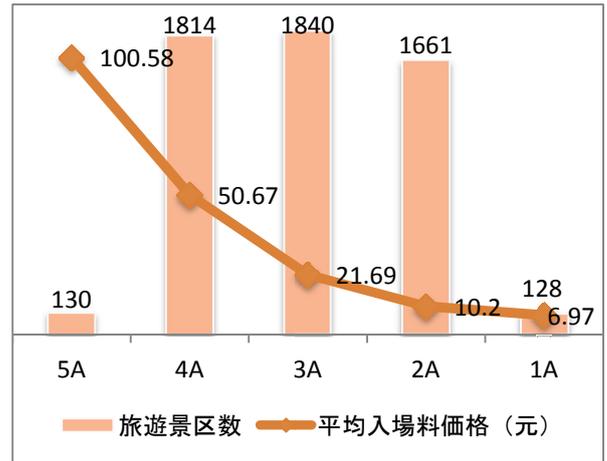


格であるが、その比率はやはり先進国と比べると高い、と同書では指摘されています。

しかしながら、ここで指摘しなければならないのは、同平均価格がA級景区全体の平均を示すに過ぎないということです。A級景区は観光資源の希少性等により5Aから1Aまで5段階に分かれており、中国人・外国人問わず誰でも一度は見てみたい5A級景区（故宮・万里の長城・九罇溝など 128 景区が指定されている）の平均入場料は 100.58 元(同約 1,900 円)、それに続く4A級景区は 50.67 元(同約 960 円)です。先述した月収換算で言うと、都市住民の月収の 4.91%、農村住民の月収の 15.2%を占め、中国を代表する観光地の「貴族化」が進んでいると指摘されています。少なくとも農村住民にとって有名観光地巡りは生計に影響してくる価格設定だと言えるでしょう。



中国 A 級旅游景区の数と入場料平均価格

なぜ入場料が高くなってしまおうのか？

明らかに生活水準と比較して高額な観光地入場料は先述のとおり、2000 年頃から入場料収入が国から地方への権限移譲により各地方政府の重要な財源として見られるようになり、競争するかのように価格上昇が引き起こされたためなのですが、実はより深い部分に問題が存在していることを同書は教えてくれます。すなわち、権限移譲以前に中国観光業は国の経済発展の重点産業と見なされ、観光産業の経済機能ばかり重視されてきた一方で、文化・社会的機能の重要性は現在に至るまで強く言及されることはなかった、ということです。

一方で観光地というミクロな視点で見ると、運営コストの増大は、入場料を引き上げる最大の要因となっていることが指摘されています。運営コストのうち、人件費は観光地運営に係る最大のコスト要因となっています。中国で続く賃金上昇は、今後も観光地経営を圧迫していくことは容易に想像がつかます。

入場料問題、今後の行方

低価格化、あるいは文化・教育的側面の強い博物館等の無料開放は国際的なトレンドであり、中国観光地もその流れに従わなければならない、と同書は指摘しています。

そのために必要な方策として、①ボランティアの活用等により観光地のコストを下げる、②収入源の多様化を通じた経営イノベーションを起こすこと、などが挙げられています。例えば、北京では観光地収入に占める土産品販売の比率は 3%に過ぎず、入場料収入が過半を占めている状態であり、今後の収入源の多様化が期待されます。

筆者だけではないように思いますが、残念ながら高い入場料を支払った観光施設の中で

めぼしい土産品を購入した記憶がないように思います。あるいは、観光施設の中で格別に美味しい食事を楽しんだこともないように思います。

観光施設、そして観光施設で働く職員のサービス水準向上を期待しつつ、入場料問題が適切な方向へ進むことにより、世界随一の観光資源を持つ中国観光地の更なる発展が待たれます。

(西平所長補佐 山梨県派遣)

